
世界にとっての喜び

鎌堂成久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界にとつての喜び

【Zコード】

Z2859D

【作者名】

鎌堂成久

【あらすじ】

500年前に怒った戦争の裏には、人々の心に住む“悪”が起したものだった。それをすべて取り除いた聖人ラコジエ。その生まれ変わり、デイバルが自らの魂へ向けられた因縁と闘いながら、新たな“悪”を消し去る旅。

諸人ござりて　迎えまつれ　久しく待ちにし
悪魔の一矢を　打ち碎きて　捕虜を放つと
この世の闇路を　照らしたもつ　たえなる光の
萎める心の　花を咲かせ　めぐみの露おく　主はきませり

強いて言つならば、俺は世界の創造者。

「この世は狂つてゐる」

強いて言つならば、おれの名はラゴジH・キャンズ。

「だから、」

強いて言つならば、隣にいる男はおれの仲間。

「俺たちで」

強いて言つならば、その仲間の名はアルバート・マズルカ。
「作り直そよ」

ラゴジエ

これからライキは幼名から名を変える。ライキはラゴジエと名を変えた。

その友達は既に名を変えてアルバートと名乗っている。幼名はニジャーエークと言った。

名は変えなくとも良かつた。だが、これからやることのためにには名を変えたほうが有利になった。

ラゴジエは幼い頃に大罪を犯した。とは言つても、名を変えたのは十五。まだまだ子供である。そして、名を変える必要があるのはこれから、戦いを起こすからだ。悪魔と人間との壮絶な戦いを。

勝ち方はあつてもラゴジエとアルバートの二人が全身全靈を賭けても民の協力なしでは世の中が成立しなかつた。

これまで幾度も殺人が起こってきた。その理由は「悪」に犯されたから。その加害者たちは人々に死刑とされた。

「これ以上死んじやう人が多くなると全滅しちゃうはずだよ、だから俺はそれを止めたいんだ」

そんなラゴジエの言葉に胸を打たれてアルバートはその戦いに参加することにした。

「これからが戦いの峠……」

ラゴジエたちの敵はラゴジエを信じない者　いや、悪魔にとり

憑かれた者や死者達だった。死者は「人形」に入り応戦を行つた。

悪は術師を中心とし、広がつた。ラコジエはある一つのこと以外はアルバートに相談し全てをさらけ出した。

それは『俺の悪は消しきれない』と。アルバートはそのことに全く気がつかなかつた。

そして 五百年以上あとに同じことが起つた。

悪魔、否、旅人

聖なる者は其処に來た。

村人達はその者に、最高かつ最悪の歓迎をした。

「悪魔が來たぞ！！」

一番最初にその者を見た一人の村人が叫んだ。

剣を担いだその者は不機嫌に顔を上げた。

「ダーレが悪魔ってんだ……」

村人達が家々から斧ら矛やら危険な刃物を多数持ち出してきた。中には猟銃などを構える者もいた。

聖なる者は、

「……」

無言であった。

そして、聖なる者に向かつて村人達が突進を始めた。

その距離わずか十メートル。すぐに「悪魔」に狂氣した村人達が襲つてくる。

聖なる者は身の丈ほどもある剣を前にいる村人に振るつた。

六人程度がバタリと倒れ、身体が真つ二つになった。

それから順調に斬り開いていく。

その向かう末には、教会に似た形の建物があつた。その建物の屋根には十字架の代わり

に蛇が二匹、反対の形に絡まつたような、他の意味でクロスしたものの乗つっていた。

そしてその隣には白い女性がいた。

「ディバルウ～！ 早くおいでよお～」

聖なる者　　ディバルの悪魔あるいは死神のような格好と反対に、

その女性は天使ある

いは女神のように白い。その上、美しい。

ディバルは、

「ん……」

うなずくだけだつた。

それが見えたからか、女性は屋根の上に美しく座つた。

その間にも、小さい子供から老人 老若男女問わず関係なく襲つてくるので、その村人達を容赦なく斬つて行く。

そして、教会が近くなりひとりわ背が高く美しい青年が立ちはだかつた。

「どけ」

ディバルは言つた。

「……退かないなら着いて来い」

「何処へ、だ」

青年は問うた。

「教会へ、だ……」

「聖ラコジエのナイフを取りに行くのか？」

「……ああ」

村人からざわめきが起つた。

そして、ディバルと青年の周りは開け人々がスペースを造つた。

「イルタラ、闘え！」

ひとりの村人が言うと、

「闘え！」 「殺せ！」 「消せ！」

村人達が叫ぶ。そして、次第にその声たちは、

「タタカエ！ ロロセ！ ケセ ……」

まとまつていつた。

青年 イルタラはその様子を面白くもなさそうに横目で見て、目前の「悪魔」の瞳に己の瞳を合わせた。

そして、

「地獄に行くとき、僕の名前憶えていつてよ」
につこり笑つて言つた。

「僕は好む他の用心棒・イルタラ。イルタラ・マチスだ。これから、

手合わせ宜しくお願ひします」

と言つて、礼儀正しくお辞儀などをしているイルタラの眼は、刃物のような灰色で鋭く痛かつた。

しかし、

「違うな。貴様は俺達の仲間だ」

突如、とんでもない発言を行つた。

一瞬、村人達の間にどよめきが起こり、混乱を招くことになった。

「イルタラ！ お前も悪魔だつたのか！」

「イルタラ！ 信じていたのよ！」

村中の者から嘆きの声が出た。

ある村人が言つた。

「悪魔とイルタラを殺すんだあつ！」

イルタラは、その村人達の態度の急変に少々戸惑つていた。
ディバルは、ふと思いついた。

白い女

「アリス！」

白い女性の名を呼んだ。

「はあーーい……？」

教会の屋根の白い女性 アリスが返事をした。

「ナイフをこっちに投げてくれ」

「わかつたわ……！」

ナイフを投げた。そのナイフは回転して、ディバルの手に収まつた。

そのナイフは柄の部分にきれいな装飾があり、一見持ち難そうだがみえたが、その外見と違い、一度握れば持った者に対応して、少し筒形を変えるという不思議なものだった。

ナイフがディバルの手の中にあることにやっと気付いたイルタラガ、

「なつ！ 何をやつているんだ、そのナイフを祭壇に返して来いっ

！ 災いが起きるぞ……！」

と、ディバルを止めようとした。

「俺の後ろにいろ……！」

静かに力強く言う。そしてそれきり黙り、

「悪魔め、今度こそは殺してやる……！」

と、村人達が再度襲ってきた。

「雨の夜に乙女が流したその泪。これを集めたこの形。聖ラゴジュの怒りの数を彫つたこの形。富みすぎるこの者たちを戻せ……！」

ディバルが言った。

その瞬間、暗い闇夜に神々しく光が満ちた。

「あなた方は間違ったことを思つてらっしゃいます。この者たちはラコジエ教に仕える者です。あなた方の仲間なのです。その者たちを悪魔として疑つた罪です。神の成敗を受けなさい」

ディバルを通して、聖ラコジエが言った。

すると、ディバルに後光が差した。

その瞬間、「あ」「え?」などと村人達が言った。

そして倒れた。

そして一時間後村から3kmほど離れた森に三人はいた。

「いつもどおりだつたね。理由を訊く人は誰一人だつていない」

「……そうだな」

アリスが哀しそうにぼやいていた。

「……あなたたちはそうやつて來たのですか?」

イルタラが問うた。

「ああ……いつだつてな」

もつともと言う顔で言つた。

「どうして……」

「……それはね、長くなるわよ? それでもいいなら聞かせてあげるわよ」

アリスが代わりに答えた。

イルタラが頷き、ディバルが哀愁じみて背を向けた。

「ディバルは口に出したくないからなんだけどね……準備はいいわね? 神々は怒るかもしねれない。ま、別々の意味でだと思つけれどね」

アリスが声のトーンを落とし、恐怖の表情を浮かべていた。

イルタラは何故こんなにディバルたちが深刻な気持ちになつているのだろうと理解できなかつた。

「そ、そんな大変なことだつたら無理しなくていいつ

「そんの大丈夫よ。余談になるけれどもこれがないときつと話が読めなくなるからね。先に説明させて。まず、神は地上に存在し存在しないってところから。ラコジエ教はここ五十年で発展してきた宗教よ。まず、最初に教えを説いたのは、さつきディバルの体を通して現れた聖ラ「ジエ・キャンズよ。あ、ついでにディバルのフルネームはディバル・ライキ・キャンズ・オーバー・クラドルつていうの。私の名前もまだだつたね。私はアリス・ストラインつてい

うのよ。可愛い名前でしょ。宜しく、イルタラ・マチス。我らが相棒！！

余談がいきなり自己紹介へと移り、アリスに背中を叩かれた。

ホルアートのナイフ

「まあ、私の名前は関係ないけど、ディバルの名前は覚えたよね？」
「どうやら、ディバルの名前がかかわってくるらしい。

「イルタラは賢いだろうから気付いたと思うけど、ディバルの下の名前のライキはラコジエの幼少時代の名前つてわかったわよね？」
で、キャンズはラコジエの苗字でそのまんま。オーバーは家の称号よ。あとは普通に。判つたわね？さてと、余談はお終いだよ。これからが本題。何故、私たちがホルアート村襲つたかつて知りたいのよね？……それは、ただ単にディバル自身の所有物を取りにきただけ。そしてなぜ、説明してから取らないかというと誰にも信じてもらえないから。ただそれだけよ

とても遠回しな言い方だつた。

「ひとついいですか？何故、聖ラコジエのナイフがディバルのものとなるのか僕には納得がいきません」

当然沸いてくる質問である。

「そこからが最も重要なところね。ディバルには前世があるの。その前世とは血の繋がりがあるのかどうかはわからないけどそれに近いことは確実なの。まあ、前世つてよりは先祖のほうが近いのかなあ？ただ、その人の記憶がうつすらあるらしいよね。私も見たことあるんだけど、その人は聖ラコジエの幼名を知つていてラコジエがそこにいて……その人を『師匠』って呼んでいたわ。ラコジエはその人の血を受け継いでいて、その人には奥さんがいて子供が居なかつた。ラコジエを養子として迎え入れ、自分の弟子とした。世界の中にこんな記述や言い伝えはないけど、そのあと家を出たラコジエをその人はつけていて、その途中で病にあい死んだわ。でも、その記憶の中にラコジエが女性と会つていることがあつたの。まあ、隠し彼女とか言つやつかしら？ラコジエもお茶目だったのよね。きっとその女性との間に隠し子を作つたのかもしれない。そしてそ

れが直接のディバルの先祖さま、なかもしれないの。ま、それつて二百年以上前の話になるんだけどね」

「……観るつてどういうことなんですか？」

「少々迷つた末に聞いた。

「えっとね、それ」

「感じたか？」

ディバルが口を開いた。その言葉は、はつきりと だが、向きはせず イルタラに云つていた。

「……今感じた」

「あら？ なにかきたのね。

怖い……なんかあたりの温度が変わつてきてる……」

アリスも表情を変え、何かがいることを察した。

「じゃあ、そいつのいる方向へ行くぞ」

「わかつたわ」

「わかつました、つてバカですか、ディバルさん？！ 逃げるほう

が言いに決まつてゐじゃないですか！！」

イルタラの通常神経が与えてくれるつっこみがでた。

「ディバルは当たるほうがいいの。止められないわよ？ この戦闘

好きつてのは

アリスがアリスなりにディバルの弁護をする。

「もし、俺達を追いかけている者であつたらずつと後ろを気にかけていいといけない。そうなるとあとから面倒だ」

ディバルはディバルなりに自身を弁護した。

「……わかりましたよ。行きましょう」

遠い東の国から

「ほつ……生氣が有り、知能の有る生物が中にある」
背の小さな少女が森の前の切り株に座つて、燃え行く森を觀てい
た。

「しかし、のつ……。いまさら消すなんて儂には似合わないだろう
のう」

老人のよくな言葉が妙に似合つ。

「お。出てきたらしいのう。だが、何故火に向かつてくるのだ
？」

炎の影から男一人、女一人が駆けてきた。

一人の男が女に服を被せ、三人で火の中をくぐつて來た。

「誰だ？ お主ら」

老人言葉の少女 雪風丸が近くの高い樹に飛び移り、ディバル
たちに声をかけた。

「あのう。その前にこちらの質問に答えて頂いてもらつていいで
すか？！」

樹を見上げてイルタラが聞いた。

「なんじや？」

「ここに火をつけたのはあなたですか？」

熱風が背中に当たりとても熱い。

「そうじやが？ もあお主らの答える番じや。やつをと述べよ
雪風丸は三人を急かす。

「僕はイルタラと言づ！」

「私はアリス。ほら、いいなよつ」

「俺はディバルだ。降りて來い！ 話がしにくい！」
ディバルの問いかけに、

「良いじやろう。降りてやる」

応じ、雪風丸が降りてきた。

「よからぬ……儂の名は市室雪風丸じゃ。遠い東の国から、全世界の視察に来た美少女じゃ」

雪風丸の爆弾発言に三人、

「「「美少女お？！」」」

絶句した。

「そうでないか？」などと言つ雪風丸は名前の割にはかなりの美少女ではある。が、老人言葉からその台詞が出たことで三人とも目を擦つた。しかし、何処からどう見ても肌の艶やかな二十代手前の少女にしか見えない。

「よく見ると、おぬしらも美的……だの」

目を細め惚れ惚れしたように三人を見た。が、咄嗟に、

「あつ、今ディバルに目をつけたわね。ディバルは私のものよ！」

ディバルの所有権を主張する。

「ほう。おぬしらそういう関係か……あまりものはあるのか？」

まるで物を扱うような物言いだ。だがアリスがイルタラの腕をグイッと掴まえて前に出した。

「こいつがあまりものよ」

イルタラが驚愕に口を開け、雪風丸が「ほう……」とじつと見つめていた。

「よい。わしの恋仲になれ

「……はあつ？！」

イルタラの口が先ほどよりも大きく開かれた。あと少しであごが外れそうになるところだった。

「それはいいとして、イチムロ。貴様はここで何をしている」

必死であごを直しているイルタラを背にディバルが問う。

「森林観察じや。いや人間観察かもしれない どのようにしてこの地域のものが火を消し止めるのかを見るためじや」

燃え盛る炎を見つめ、ぽんやりと答えた。

「どうじや、きれいじやないかの？ 儂はこの景色が気に入った。

そして、今燃えているこの樹木らは年老いすぎた。そろそろ地に這

いつくばっているよりも新しい若木にこの世を任せるべきではないか。その引継ぎの行為が樹木らでは出来ぬ。儂はその手伝いをしているだけじゃ」

先ほど、雪風丸が上っていた巨樹も既に樹齢数百年時を越え立っている。

「どんなことじたら神にさがら……いますよ……」

イルタラが痛みの直らないあごを必死に動かして反論する。

「そう……自然の流れに反することをわしは起こしたのだ。そして今、そんな儂を迎えてに来たらしい」

雪風丸が目を細め、誰もいないはずの場所に視線を置いていた。

狂つた？

三人がそう思つた。

そして数歩歩き、右手を前に差し出し、炎に向かつて、

「倒れる？！」

イルタラが雪風丸に駆け寄りその体を支えた。

「……ありがとう。おかげで儂はとても佳い夢を見た気分じゃ、雪

風丸」

雪風丸の口から出た言葉は、雪風丸への言葉だった。それから雪風丸は目を閉じた。

「市室…… たん？ 死んだとか言わないですよね？」

「ディバルとアリスに向けて問う。

「……この私が死ぬものか。イルタラとやら」

不機嫌な表情の市室雪風丸がそこにいた。

そして、その雪風丸は先ほどと口調が少々違っていた。

「どうやら、先刻の市室さんは別人のようね。説明できるかしら、本物の市室さん」

アリスが推論し、問う。

「そうだ。先刻の奴は放つべき捕虜だ。私の身体を借り、そいつらは死後の世界とやらに“放たれる”のだ。そこは“樂園”といつてそいつらには、パラダイスみたいなところらしいが私はそう思わない。何せ、洗脳されてそう思わされてるつてトコだからな。つて、意味判つたか？」

「全然わかりませんわ、イチムロさん」

質問を立てたアリスが答える。

「そうやって呼ぶでない！ 雪風丸と呼べ、アリス嬢。私の故郷は、この地域と違い、「市室」が姓で「雪風丸」が名だ。とは言つても、両親は男子が欲しかつたらしく、私に男子の名をつけたのだ。酷いものだらう？ どうだ、この地域では？」

雪風丸は左手に紙、右手に筆、とメモをする態勢に入っていた。

「じゃあ、雪風丸。私のことはアリスって呼んで。あとの二人も適当に呼んでいいから。そして、話を続けて欲しいんだけど？」

頷いて、紙と筆をしまった。

「私は、詩人であり、靈能力者であり、國からの使者なのだ。私は詩を作り、心理と靈能の研究をしている。そして、いつの間にか沢山の成仏されない靈が憑きはじめた。そして、一時的に私の身体に入れ、やり残したことを達成させ“放つ”。それは今、私にしか出

来ないことだと思われる。それから、私は一度、身体を貸したおかげで成仏しそうになつたことがあつたのだ。そして私は死後の世界を見たのだ。そこはまるで強制労働をしているような地獄のような有り様だつた。だが、そこにはいる者たちは幸せそうに笑つていた。その時に私は考えた。それが、“洗脳”だと。そうは言つても私の論理中では世の中の言葉全てが“洗脳”だと思われる。それで“洗脳”されなかつた物はそこですぐに死して、転生してくる。私は成仏前の靈たちを“捕虜”として呼称している。“捕虜”らは一種の生贊だ。一人の人間を殺し神に生贊と捧ぐとすぐに降臨する時とそうでない時があるだろう。そうでないときに殺された靈には未練があるのだ。成功したときはこの地上に何も小心を残さない奴のみだ。それを望み、“自称”『神』が降りてくる。私はそれを『神』だとは思わない。『神』 자체がいのいのだから

この世界には、宗教というものが成立しているのはラゴジエ教しかない。その他の人々は自然神や先祖などを崇拜している。これによつて、“他人”というものを探めているのはラゴジエ教だけといふことになる。

「どうか……貴様は今の世を記録するためには旅をしているのか」
ディバルが納得した。

森は燃え続けていた。

「消火しに来る人はもう来ないと 思いますよ、
雪風丸」

怪訝そうに見てイルタラに問う。

「……先程、ここから一番近くの村が全滅しました」「そうでもないぞ。一人だけ生きている」

村には一人の同教が教会に籠つていた。

「あのとき、シスター達は表に出てきていた。

あのとき、シスター達は表に出できていた。俺は……

司教を

「だけど、僕は司教様に言われて……」

「そうだったのかつ

「あー。ディバルが言いたいことは、その司教の策謀ということね。だんだん真実が見えてきた。

「その司教はお前らの探してゐる物、持つてゐるみたいだ。『聖ラゴジエの最初の剣』」

“聖ラゴジエの最初の剣”は、ラゴジエがラゴジエの父から授かつたという幻の剣である。

その剣は世界に一人だけが“本当の使い方”を知つてゐると伝えられている。

しかし、“聖ラゴジエの最初の剣”は、誰も見たことがないと伝えられている。

「ディバル　お前は二度目の聖人になるんだろ？」「

「何故、そんなことを知つている、貴様！」

雪風丸につかみかかり、首を絞めそうになつていて。

「やめろつ、ディバル！」

「そつそれは……私の、知識で……考えたつ、結果なのだつ、……そして」

ディバルが力をゆるめ「そして……？」と、訊く。

「ああ、村からお前らについてきた靈が司教のしたことを私に告げてきたのだ。そして　　村人全員が死んだ」

司教はその靈を裏に連れ込み殺していた。“聖ラゴジエの最初の剣”を使って。

その後、仮面をかぶり“村人全員”を皆殺しにしたという。

(不味いことになつていて)

「……そつは？！　おかしい。何故死人が出でているんだ、貴様つ！！」

「そうね……おかしいわよね」

「はあ？　だつてディバル、君が村人達を殺したじゃないか！　全て！　おかしくはないよ。その司教つて君のことじゃないのか？　そうだろつ！」

事実をそのまま見ると“確かに” そつなるはずのこと。

「いや、俺は生き返らせたはずだ」

「そして、少しの間眠らせた」

ディバルの使っていた剣は“第一番・詞に込められた”という剣である。

その剣はラゴジュがかつて革命を行った仲間のアルバート・マズルカに作り、そしてそれをアルバートが戦いに使つたという聖剣である。

そして、その剣には人を眠りに誘い込む“同調”という力を持っている。鞘を指でなぞつていくときに無聲音ながら音波で人の脳を操作する。時には、脳を狂わせ、人を自殺に追い込む、恐怖の武器である。しかし、音波を使用している者にも影響が出るため、使用者側には音を操作する技術を必要とする。そのため、音を知り尽くしていないと使えない。

「……何か、煩わしい話になつてきたらしいな……そして、私の使命が増えるようだな」

「お前らは村へ向かうのか？」

使命　　“捕虜ら”を“樂園”へ“放つ”ため。

「貴様の話を信用してやる。俺たちはあと一つ　　最初の聖剣を探さなければならぬ」

「少しの可能性でも信じるの、私たち」

「ということは」

神を前世に持つ青年とその恋人と司教に騙された青年と東の異国の少女が旅立つ。

「うそだ……粉破微塵……」

「灰……だな」

村が無人になつていた。

そして、教会の前には八重歯を剥き出しにした祭服の男が立つていた。

祭服は黒き血に濡れ、手には黒く光る剣、口元は狂喜に歪んでいる。そして、その周りには悪に満ちた気配が漂つていた。

「この短時間で村人全員を殺した……か」

ディバルが呟いた。

「ねえ……ディバル。私ちょっと調子狂つてきてる。私には……力が強すぎるわ」

「だつたら休んでおけ、アリス。お前はこれだけの靈に負けたんだろ？ そして、傷一つ一つが痛ましく見えるのだろう？ つまり、お前は靈が見える」

「ええ、そうよ。よく判ったわね」

「同種には同調するのだ」

雪風丸が会つて初めて笑いを見せた。

「あつ、じゃあ僕が連れて行きますよ」

イルタラが進み出て、アリスに肩を貸した。

「少し、よくなつたら戻つてくるわね」

「ああ、気をつけていって来い」

笑みに見えぬ、微笑みで見送った。

司教は未だにディバルたちに気づいてはいない。

アリスの独白（コメ）

「ディバルつたら素直じゃないんだから、肩を借りながらも苦い顔をしてアリスが文句をぶつぶつ言つ。『ディバルはとても無愛想ですよね。僕も思います。さつきだってそうですね』

イルタラが「うんうん！」と言つて頷くが、

「いや、私が言つてるのは『何でこんなときだけ笑つたりするのよ』つていうこと。まるで今すぐ死んじゃうみたいだわ」

「一つ、聞いていいですか？」

「なに？」とくなづいた。

「アリスはディバルの何処が好きなんですか？」

すると一瞬で面を赤らめて顔を背けた。

「そつ、それはあ……ただ単にそう想うからなのよ！ どこかつていつたら……優しい……からだと、思つ」

落ち着いてきて「なんてこと聞くのよ！」と憤慨した様子だった。「僕には優しいようには見えないけどな～？」

イルタラは深く考へるようだが、

「イルタラの優しいとディバルの優しいは違うの でもね、実を言うと私が勝手にディバルの恋人つて言つてるだけで、きっとディバルに迷惑かけるかもしれない。 だとすると、それを否定しないところがいいの。普段はあんな感じで怖いけど、本当はとつても正義感を持つてるの。さつきだって村人を蘇生したのはそれから。でも、自分が“殺した”相手は生前の姿で生き返らせることが出来るけど、他人が殺した相手は戻せない。だから、ディバルは自分の正義を崩さないようにするために、敵と闘うの。きっと今、ディバルの心の底は消えない炎が全てを埋め尽くしているはず。 私は

……そんなディバルが暴走しないために旅についてきてるの。元々はね、私は教会のシスターだったの。でもそこには聖ラゴジエの杯

があつて、それをデイバルが奪いに来たの。三年前の話だけ……

「一息ついてまた語り始めた。目をつむり思い返すよ。」

「そのとき、村中の人々が総出で、食い止めようとしたの。でも、デイバルの力は強大だった。みんなが死んでいったわ。デイバルを止める力があつたのは、私だけだった。でもね、そのときに

声が聴こえたの。『オレヲトメロ！　コロシテクレ！…！』　だって。私ね、『コイツ莫迦だ！　ひと殺しといって、自分も死ぬなんて卑怯だ！』　って思ったの。それと同時にデイバルが座り込んでしまつたわ。そのうしろ姿がレイラに似ていた　レイラってのはその時の彼の名前。イルタラみたいに優しい人だったわ。でも、デイバルが私から奪つちゃつたの　だけどね、私、そのうしろ姿を見て『レイラ！』　って走り寄つたの。そしたら、それがレイラじゃないことに気付いて目の前で足を止めようとしたらデイバルが手をまわして抱きとめてくれたの。そしたら私ね、きっと緊張の糸がほつれたんだと思う。崩れ折れちゃつて、デイバルの腕の中ですつと泣いてた。そしたらデイバルが『すまない。俺のせいでの、出るはずのない犠牲者を出してしまつて』　だとさ。最初は全く信じられなかつたわ。でもそのあとに私の首筋に生暖かい液体が流れたの。すぐにそれが涙だつて知つて私が寒いつて訴えてると思ったのかしらね。ギュッて抱きしめてくれた……そういうのが私たちの出会いだつたわ。そういうところが気に入つて、デイバルの彼女つて名乗つてゐるわけよ。きつと、デイバルは私のこと、なんか勘違いしてるかもしれないけど、思いが伝わらなくたつて、私はデイバルのことが好きだから……

……あ、そうだ！　私、出来るだけ早く戻るけど……デイバルが暴走したら、お願い！　殺す氣で……止めてあげて……

最後に微笑んだアリスを見て、イルタラはその場から走り去つた。

「お願い。早く、早く靈よ、消えてちょうだい……」

「……おい。行かせてよかつたのか？ お前」「あいつは強いから、いい」

アリストとイルタラが去り、雪風丸がその方向を見て訊いていた。

「何故、そうはつきりと“良い”と言い切れるんだ？」

「違う。俺は“いい”と言つた。“良い”とは言つていない」

「それはどういう意味だ？」

この場のことを雪風丸はどう思つていいのやら、ディバルを質問攻めにする。

「最初の出会いで俺を“止める”力を持つてゐるくらいだから放つておいて“いい”ということだ」

“いい”と“良い”を使い分けている様子だった。

「お前、それ本心で言つてないだろ？」

雪風丸は目をつむりそれを聞いて出てきた結果として言つてているのか。

「……」

それに対してもつとも卑怯な無言という返答を行つた。

「……仕方がないな。お前の要望どおりアリストをここへ連れ戻せばいいのだろ？」

雪風丸がやけくそになつて吐き捨てる。すると、ディバルが足で何かを描き始めた。

ソンナコト ダレガイツタト キサマハイイタイ？

(「コイツ、性格が相当曲がつてやがる）

さつき以上にやけくそになつて、

「あー！ わかった。お前の勝ちだ！！」

そしてすぐにその返答が返ってきた。

「だれがいつ勝負をしてるんだ？ やはり貴様は“捕虜”とでも話してゐるのか？」

「……お前、それは偽装とこりやつか？」

「何故俺が偽装する必要がある？」

その顔を見ているとデイバルは正氣でモノをいっている様子だった。

最初は『デイバルを雪風丸が巻き込む』という会話が『雪風丸をデイバルが巻き込む』という会話になりつつある。

「う……なぜ、私がこのよくな奴と話しているのがわからなくなってきたああああつつ……！」

雪風丸が嘆き叫んだ、フリ つまり、偽装 をした。

「お前の行動が原因だ」

デイバルは痛いところを衝いてくる。

「違うつ……あれは私ではなく、あのとき宿していた“捕虜”的な正論を繰り出すが、

「“捕虜”を貴様は侮辱できないと思っていたのだが」
いじめているつもりなのか、それ以外なのか、デイバルの表情はずつと変わりなく何かを考えるようだった。

「……なんて観察力持つてんだよ、お前」

「この程度なんて、考えりやわからることじやないのか？」

雪風丸はデイバルを再認識した。

この生物の右に出る者はいないだろう。そして、この生物は危険ゆえにこの生物を超す戯けた生き物はない、と。

「……俺は、考へても出でこないアイデアがあるから、闘っている

「ただ自分の全てを表すとそれで収まる、といつのがデイバルのそれだった。

敵、 優しい人間

「デイバル！！ 雪風丸！！ イルタラが走つて来た。 司教の様子は？」

「遅かつたな。暇して私が苛められていたのだぞ！」
「い…じめられてた…誰に？」

「あ。」
デイバル
正しくはデイバルの喉
を指差した。

またもや、足で何かを描き始めた。
ゴーナシタフダメジヤナイロカ?
アアリ
ダメナシダ、

8

（なんだ？！　この人おーーーー！）

なんだん、
エスカレートしている。

「お前、何か言いたい？ そんなに私が気に入らないのか？」質問しているくせに引きつった笑顔をした雪風丸は、相当怒っているようだ。

「あ、あのアリスが……僕の去り際にこんなこと言つてましたよ。『お願い。早く、早く靈よ、消えてちゅうだい』って。僕、すつごく耳がいいんですよ」

「それは難しい」とだ

「へ？」とイルタラは首を傾げたがディバルと雪風丸は「靈が消える」ということを真剣に考えているようだつた。

「出来るわけがない。 “消す” と “放つ” では意味もやり方も違うのだ」

“捕虜”を“消す”ことはできない。が、放つといつ“”とは短時間での手段はあるのか。

「では……“放つ”ことはできるんだな?」

「少々荒いやり方だがな」

雪風丸は不敵に笑んだ。

「後ろにいる。巻き込まれるぞ! 精らは私の前に来るがよい」
雪風丸が軽く準備体操をして、スッと左手を集まつた精たちに向かた。

精たちは脅えた表情一つしない。自分たちの行く末は決まつているからだ。

「準備は出来たな? 今ここで未練に苦しむよりは、すつきりと“樂園”へ逝かせてやる!」

奥義・雪崩双曲集・第零番“霜風葬華”今、迷いし“捕虜ら”
を“樂園”へ“放て”

雪風丸が言つと、左手から神々しい光が満ち、精たちが“放たれた”。

「妙な空気が消えましたね。アリスを呼んでくるよ」

イルタラが走り出そうとすると左肩をディバルに?まれた。

「司教が……動く!?!?」

それと同時にディバルたちに気付いていなかつたはずの司教が人間離れした速さで走り出した。一瞬消えて、姿を現したのはディバルの頭上だった。

不吉な笑みを浮かべた司教は狂つた声を出した。

「貴様かあー?!! 私の命を奪つたのはア??」

“聖ラコジエの最初の剣”で額からディバルを貫こうとする。

ディバルは“第二番・詞のこめられた”で受け止める。が、少しだけ腕をかすつてしまつた。

「俺がいつ貴様を殺したというー! それに貴様は、今、生きているだ」

「レフ、レイラッ？！」

アリスが司教を見て、男の名を発した。

「レイラ？ レイラね、生きていたのね？！」

安堵の表情を浮かべる。

「アリスつ、来るな！！ こいつは敵だ！！！」

それでもアリスは駆け寄ろうとする。

アリス！！！

三つの声が重なった。

一つはデイバルが警告する声。一つはイルタラが呼び止める声。

一つは司教 レイラが呼ぶ声。

そして、アリスの耳に届いたのは、レイラの声だけだった。

それと同時に、雪風丸が地を蹴る音と清んだ声を響かせた。

「雪崩双曲集・第三番“雷の巫女”！！ アリスをこちらへ！！！」

どこからか水がアリスを雪風丸のほうへ引き寄せた。全身がびしょ濡れになっている。

「アリス！ 目を覚ませっ。お前はあの怪物を知っているのか？」

「カイブツ……？ レイラは怪物なんかじゃない。人間よ！！ とても優しい人間よ！！！」

少し前の過去

アリスの目の前の光景は三年前の「ディバル襲撃」のときが鮮やかに繰り広げられていた。

最後に残ったのはアリスとディバルだけだったが、その最後に消えた生命はレイラ・ルネサンスだった。

レイラは最後までアリスを護り抜こうとしていた。教会を封じ込めていたのはアリスだった。しかし、アリスは恐怖に怯え封印を解いてしまった。アリスを殺せば、その教会の封印は解けるはずだった。

レイラは最期まで 魂くなるまで 護ろうとした。

だが、斃れてしまつた……。

そのあと、未練が残り亡靈と化した。それから、木を伐り、それを彫つて、亡き身体を作り、「外見だけのレイラ・ルネサンス」を創り上げた。決して、それが人間らしいとは言えなかつたが 言つてしまつたら、人間の存在価値が消失してしまうのだ。

その身体に入るために悪魔が一緒に入つた。

悪魔は自分では身体を創れないが身体とシンクロは出来る。また、人間の靈は身体を創れるがシンクロは出来ない。

だから、「悪」と「両」が手を結んだ。

シンクロするとみると堅かつた木が人間の皮膚と化し、肉と化し、内臓・呼吸器と化し、脳と化し、「最強の武器」と化した。

そして、旅をして、この村に辿り着いた。

ディバルはこの村に来るだろつと待ち構えていた。何年でも待とうと思っていた。

「神」は「善」と「両」と「悪」という、相容れぬものを創つた。そして、それを争わせた。

「神」はサディストだ……。

ディバルと雪風丸は思つ。

狂おしく

「善」と「両」と「悪」を人の心、凡てに宿らせ、争わす。

そのとき、人はいつの間にか自身の總てをそれに委ねてしまう。平穩な心を創つた者は、全てが平等に存在しているか、全てが死んでしまつたか。

青い心を持つた者は、「善」「両」「悪」。あるいは、「善」「悪」「両」と順位をつけたか。

黒い心を創つた者は、「善」が完全に死んだか、「悪」と「両」が手を結んだか。

不安定な心を創つた者は、「両」が強いはずのほかの二つを抑えて一番上に立つたか、最悪な条件は「両」だけしかそこに存在しないといふことだった。

「不安定」というのは人の生命までもをおびやかす。どこでも。どんな時代であろうとも。

それは、生活、精神を狂わせ、死に追いやる。

レイラは、「悪」と「両」が手を結んだ状態だ。だが、それは長くは続かないだろう。

いつしか、「両」がその心を支配してしまつから……。

「あいつは狂つた靈だ!! アリス、お前にも見えるはずだ!! 身体からはみ出でしまつた靈体が!!」

「な……に? それって、そんなもの見えるわけないわ それに、離して?! レイラを助けないと。一対一は卑怯よ!! お願ひ! 離してつ、レイラが死んじゃうわ!!」

うつろな目をして、どこか遠くのレイラを見ていた。

「あいつはもう死んでいる!! “人形”に入つているあんなものは、人間とは呼べないぞ!! あれは……“両”的支配した怪物なのだ!!!!」

「そんなもの……私なんかに分かるわけないじゃない!!!!!!」

アリスは叫び、自力で“霧の巫女”的束縛を解いた。

ディバルは振り下ろされた剣を刃で止め、アリスに言った。

「来るな！！ アリス、お前はここに来てはならない！！！ 三年前のように、そこで脅えていてくれ。さあ！ 座れ！！！」

舌打ちをして、“第二番”を共鳴させた。そして、それと同時にアリスが座り込んだ。

そこでおとなしくしてくれ。お前が……一番苦しいはずだが、と。

「また……あの光が私を照らすの？」

涙を流し呆然とつぶやくことしか出来ないアリスに、雪風丸が、「あいつは、ただ、ディバルに嫉妬しているだけだ。気にするな、アリス。お前のせいじゃない。この戦いはどちらにしたって後悔はついてくるのだ。亡靈が放たれるとそれで、後悔。ディバルが死んだら亡靈も放たれて亡靈も放たれ、ディバルもきっと放たれるであろう。結果は何も変わらない……」

「貴様は……天へ上るはずの身。というのに、どうして“遺物”を集めつ……！」

「バカがつ！ 僕は貴様のことが憎いんだよ。貴様のせいで俺は死んだつ！！！」

“最初の剣”が振り下ろされて“第二番”で跳ね返す。

“聖”だけの剣を持つ“聖人”と“聖”と“悪”を混同してしまつた剣を持つ“兩人”が刃を向け合つた。

斬り倒す！！

同時に一人が走り出した。

「イルタラッ、援護を頼む！」

そして、二人が交差した。

キィイイイン

ディバルの“第二番”がしなつて響いた。

「ハッ。俺にその攻撃が効くものかっ。実際の肉体がないんだからな！！」

音による攻撃は無駄かと思われた。

そして、次の瞬間、

レイラが倒れた。

「 ！ 何故だつ？！」

問われた。

「フツ」と口元を歪ませ、
「莫迦が。音は振動だ。作り物くらい壊すのは容易。“悪魔”が入
つていながらその程度か・・・・・・ さあ、お前の最期だ」
シネ……。

ディバルの指が刀の背を這つて、無という音を出した。

レイラは叫んで走り去る。

「イヤだつ！！ 僕は死ネない！！！」

そして、

「森で燃えて灰になるだろ？」「……」

そういつた瞬間、

「レイラ待つて！！ レイラ、レイラあツ！！！」
とアリスが狂つたようにレイラを追いかけ始めた。
アリス？！

またも三つの声がアリスを呼ぶ。

しかし、全ての声はアリスの心に響くことがなかつた。

「はあっ・・・レイラ?.. 何処にいるの? 出て来てよ.....ねえ
つ! お願い、出て来てよ!..」

アリスは暗い森の中で立ち尽くしていた。

その暗黒の世界でレイラを呼ぶが応答は聞こえない。

聞こえるのはそよ風の吹く音とそれで木々が揺れた音。時折、動物が哀しそうに啼く声が聞こえるだけだった。

アリスは森の置く深くまで進んできたらしい。

近くの木にもたれて、やがて崩れるように座った。

「.....また、独りにさせるんだね...」

ディバルのことは頭になく、それだけしかつぶやく」とは出来ない。

すると、森のずっと奥に火の玉のような光が見え隠れしていることに気がついた。

アリスはすくっと立ち上がり光の方向に走り出した。

だが、すぐに、

「いたつ」

小さな悲鳴を上げて左太ももを擦つた。

すると手には、べつたりと赤い血がついていた。

「.....けが、しちやつたのね」

他人事のようにそれを見て木々を搔き分けて進んでいく。それで光のある位置は遠のいていく。

ふと思つて左を見るとそこにも光つているものがあった。念のため、右も見てみると無数の光が集まつたり離れたり、ついたり消えたりしている。

「.....レイラの命が私を照らし呼んでいるのね? 主よ、我を導きたまえ」

アリスは無数の光のある方向へ歩みを進め始めた。

すると、その無数の光のところにつくと急に視界が開けた。

「……ほ、蛍」

思い込んだ先は澄んだ水にほのかに青白い月を浮かべた湖があつた。そこには、同じく青白い光を出す蛍たちが飛び交っていた。「私を照らし呼んだのは村の人たち……レイラ一人の命にこだわること? でも、特別な人がいるはずなのに……いてはいけない。世界は矛盾してるわよ」

自我を取り戻して嘆いた。

『アリス姫よ、アリス姫。湖の中にお入りなさい。汝の罪が全て洗い流されてゆきますよ、さあ!』

頭上左から男の優しげな声が聞こえた。

包まれるように気持ちの良い声の方向を見ると漆黒の髪に白い肌の男が微笑んで立っていた。

『さあ、どうぞ』

言われるがままに湖に入ろうとしたとき、

「アリス! 入っちゃいけない。入らないでくれ」

顔の三分の一が焼けてしまつたレイラが走ってきた。さつとアリスを抱えて岸に上げた。

「え?」

アリスが驚いて声を上げたと同時に腹を殴つて気絶させた。

「あんた、誰だよ」

レイラが、“悪”を抑えて“善”と“両”で対話しようとした。しかし、やつとで魂を“身体”とシンクロさせていく状態で実際鬪えるところではなかつた。

「へ? 私はアルバート・マズルカ。君と同じような類いの人と言つてもいいかもね」

白肌の男 アルバート・マズルカはのほほんと微笑して見せ、邪悪な瞳を差し出した。

「復讐者か“人形”のどちらかだな?」

「君はどっちだと思う?」

「……臣者だと思ひ」

「 それでもなかつたつしてね」と、叫つてレイラ近づいてこべ。

「特別に教えてあげよう、同胞に「レイラはあとずさつてアリスを護ろうとする。

「私はデイバルには何の怨みもない。私が怨むのはデイバルの魂だよ
ほら、それでもないでしょ？」

「あ、ああ。だが、なぜアリスを狙う。アリスは関係ないはずだ」
納得がいかない。アルバート・マズルカとはデイバルを通しての
間接的な関係にしか過ぎないはずなのだ。

「へ？　ばかみたい。まず、復讐するならその人の大切な人、ある
いは好きな人を殺すべきでしょ？　だから殺すんだよ」
「俺はそんなことはしない！！」

剣をしつかりと構える。

「それはそうでしょ。君の愛しいアリス姫はデイバルの大切な人で
もある。そして君は、アリス姫を助け出したい。そうでしょ？　そ
したらアリス姫を殺しちゃいけない　そして、君にはハンデがつ
いてしまった、つてことだよね？」

湖の水をすくい、少しすすり飲んだ。

「ん~、美味しいねエ　でもね、復讐には一いつの種類があるんだ
よ。私がやる復讐は“精神的”に攻撃するもの。君がやつてるのは
殺していいターゲットがデイバル一人しかいないから“身体的”に
しか出来ないのさ。私はね、今決めたよ。君も殺すのぞ」

一步たじろいて、剣を迎撃に備える。

「そんなボロボロな“人形”になつても戦おうとするんだね。君つ
てすごく莫迦だ」

「そんなん！　あんただつて“人形”だろ？！　あんたもいつかは精
神が破壊されるはズだ」

普通ならばそうだった。

「君は大莫迦だね。私の“身体”がどれだけの年月を食つてきてる

か分からぬんだ。ほら、？人形？だと成長できないでしょ？私は五百年の間この世を彷徨つてきたのさ。そして、ディバルの魂ラコジエの魂の破片を見た私はすぐに？身体？をつくつたんだよ。私が消滅させたはずのラコジエが戻つてきたんだ。協力的で強力な悪魔と手を結ばなきやね。私ももう“悪”の占領する“悪人”つてわけさ。自我の消え失せただの？人形？つてゆーことよ。だから、殺すことを躊躇わないのでさ」

「オーケー？」ヒーッコリ笑つて首を傾げる。それから、クスツつと笑い、

「早くこの？身体？とおさらばして、新たな人生つてやつを生きたいよ。でも、これだけ未練つてのが残つてたら、私は心置きなく成仏できるわけないよ。世界の創造者ラコジエ・キャンズを殺すまではね」

湖に映つたアルバートの顔は見た目以上に機械的だつた。月夜に照らされたアルバートの背中は彼生来の姿を少しだけ取り戻していた。

『アリス！ どこだ？！ 出てきてくれ！』

三人がアリスを呼んでいる声が聞こえた。

「あらあら、敵が来るみたい そうそう、私が殺す前にディバルを殺したら、お前の代わりにアリス姫の首を飛ばすことにするよ」アルバートは笑みを浮かべて手を振つた。そして、闇に溶け込むようになつていった。

「アリス……俺つてどうしたらいいんだよ」

氣絶して倒れているアリスに呟いた。

アリスを捜す三人の声が近づいてきた。

「またあとで、会いに来るよ」

それだけ言い残してレイラもその場を去つていつた。

アリスは細く目をあけてどこへとでもなくぼんやりと呟いた。

「私だつて、どうしたらいいか……」

アリスの頬に涙が光つた。その涙が何かを照らすように銀の輝き

を見せ、墮ちていった。

それに誘われたように、ティバルたちが湖に出てきた。

「無事だつたらしいな、アリス」
雪風丸が首元の動脈に触れて、顔色を確

雪風丸が首元の動脈に触れて、顔色を確認した。

「……レイラにおなか殴られたといおまではおぼえてるんだけど、そ

アリスは確かに気絶していた。 目を覚ましたときの辺りの空気が
「街は全部懶が升りてゐる」

「布かつたのか？」

ディバルが湖の螢たちを見てアリスに問うた。

「怖かつたけど……私、泣かなかつたわ」

アリスの瞳を見つめ、事実を指摘した。

アリスの目元は少し腫れて、泣いていたことがはつきりと窺えた。

「…………こめんね、ティハルのこと忘れてて、私って心のない人ね。」

「ぶつきらぼうに答えてアリスを腕に抱いた。

「いや……」とアーヴはそれだけを繰り返し言い繰りだ

「イチャつこておるな
どうだ？ 私らもやるか？」

「いい つて。そんな、年下からのアタックはいけないよ。それ

「雪風丸は何歳なんですか？ とても小さいですか？」

「雪風丸？ どうかしましたか？」

肩に置かれた手をつかみ、ギュッと潰すように握り締めた。

「イテテテテ……雪風丸。放してもらえませんか……？」

イルタラが顔をのぞいたら、

「誰が小さいのだと言った？ イルタラ……お前があつ……！」 私が

手のひらサイズだといつているのかあつ？！」

そして、雪風丸がイルタラを追いかけ始めた。

一時的な平和が訪れたらしい。

「 今夜でこの戦いが終われば、新しい朝日に照らされて新しい日々を迎えるかな、ディバル」

「つづづく思うが、お前は詩人だな」

暗い湖にぽつかりと浮かんだ月はそれこそ鏡に映つた世を映し出しているようだつた。

「何やつてんだ？ イルタラ、雪風丸」

ディバルが木にもたれてアリスが仁王立ちで立つていた。

注意された当の二人はイルタラの上に雪風丸がちょこんと乗つかり耳を引っ張つていた。なんとも和やかな情景である。

「そんなことしている暇はないぞ。それとも貴様らは行かないのか？」

「え？ どこに行くつて言うんですか？ その前に レイラ？」

さん、出したつけ その方、どこに行つたかつてわかるんですか

？」

結局、ディバルたちの追いかけるべき敵といつのは、レイラなんだ。

「剣を持たれている以上平和は訪れないのよ」

「でも、あの入つて噂に聞く……前の恋人さんじやないんですか？」

だか

雪風丸が飛び掛つてイルタラの口を封じ、左腕で首を締め上げた。

「……なんだよ？」

「私がこの程度のこと、ディバルに言つてないとでも思つた？」

二人はうんうんと大きく頷き、イルタラが雪風丸を覗いた。

「あの、雪風丸は……聞いてないですよね？」

左頬をペチンと叩かれて「は？」と首を傾げた。

「ふんっ。お前はろくに人の話を聞いておらんのか？ それとも世間知らずといつものか？」

雪風丸は皮肉を含めて言つた。

世間知らずは両者とも……と。

ディバルとアリスが心の中でつっこむが、この一人もそういうところもあるし、その上危険なことを平氣で冒すこともどうかしている。

「ま、ケンカしないで。平和って言う大きな花を咲かせにいこうよ、ね？」

そして四人はまた、歩き出した。

結界の主

「じゃあ、この辺で一歩に分かれるぞ」
ディバルが羅針盤を見て言った。

「結界…がここで途切れているからか。ではお前とアリスで私とイルタラといふことになるな」

雪風丸がしゃがみこみ一本の糸をのばした。

どんな色にでもなるその色はプツンとそこから切れていった。

「ああ、それでいい。貴様とアリスは意思伝達の印をつけておけ。この結果が元に戻ったとき、すぐに駆けつけてこられるようだ」アリスと雪風丸が互いの手のひらを合わせ、次に左胸付近に手を当てる。すると小さなショックを受け、数秒の停止時間があった。

「あの、一つ疑問が出たんだけど」

イルタラが結界の行く末を見ながら言った。

「なんだ？」

「いや、さあ。この結界って誰がしたんだろう？　この森に術師がいるって聞いたけど、まさか力が弱いって聞いてたのに…そんな術師がこんなに巨大な結界なんて張れるわけないよ」

術師とは、神術や魔術、鍊金術などを多方面から研究、使用などをする者だ。そして、森に住まうのは主に魔術に長けている者だという。

「だが、術師といえどその才能を突然開花させたという事例もよくあることだ、と私は聞いたことがある。それにこれは、見た目は神術で作られたものに見えるが実際中心は魔術で構成されている。誰か、拡大鏡を貸してくれ」

「はい、どうぞ。これを使ってください」

四人の誰でもない声が雪風丸に拡大鏡を手渡した。

「ありが…って、お前誰だよ」

雪風丸が後ろに飛びのいてその声の主を指さした。

「え？ え～と。僕の名前って何だっけ……あ、思い出した。僕はレン・マズルカって言います どうして、四人とも後ろによつていつていらっしゃるんですか？」

闇の中から眼鏡をかけた白い顔がぽつかりと浮かんでいる。その位置にレンは一人取り残されていた。

「いや、だつて怪しいですよ

「お、驚かすなっ！！！」

「どうしてここにいるのかしら

「……」

四人からそれぞれの言葉が飛んできた。

「へ？ えつえ～？！ そんないつぺんに喋られたら、僕聞き取れないですよお～」

そしてレンが頭を抱えて座り込んだ。

「え？ たつた三人の言葉を？」

イルタラが肩に手を置いて横から覗いた。

「実は僕、十年前から誰とも会つてないんですよ。それで自分の名を名乗る機会が無くて……それに、普段、術名しか言わなかつたので」

ニッコリ笑うレンにディバルが歩みを進めて問う。

「ここに結界を張つたのは貴様か？」

ギロリと鋭く光る眼がレンの擬似痛覚を刺激し、刺さつた。

「貴様は、アルバート・マズルカではないのか？」

さらに質問を重ねる。そして、レンは「アルバート・マズルカ」という言葉に目を輝かせた。

「ぼ、僕つてアルバート様に似てているんですか？！」

「俺はそんなことは言つていない！ 貴様はマズルカなのかと訊いている！」

ディバルは勢い余つてレンに攫みかかるとしてアリスが後ろから止めた。

「はっ？ 僕は確かにマズルカです。でもこれはアルバート様を尊

敬するために名乗つているだけで本名なんかなんだつたか思い出せません」

ディバルの顔が怒りに歪んだ。

「アルバート・マズルカって一体誰なのよ？」

アリスが背中から訊く。

「……」

無言とこゝう返答だつた。

イルタラはすつきりとした顔立ちのレンをよく見た。

レンは、その見た目からとても若い少年といつことが窺えた。年は、十四から十七ほど。

「十年前ですか……かなり幼いときからのようですね。言葉はビリやつて覚えたんですか？」

「屋敷にある本を読んでるからだだと思います。どんな本でも揃つてるつて感じですよ、僕の屋敷は　あ、そうだ。家に来ませんか？」久しぶりに人に会つたので僕はとても嬉しいんですよ」

一年で一番夜が長い空にやつと月が昇つた。この月には今にも動き出しそうな奇怪な黒い影がぽつかりと浮かんでいた。まるでそれが現実というように。

「術者の屋敷か…興味があるが、ディバル、アリス、イルタラ。行ってみないか？」

「わあ、来てくれるんだね？」

ディバルが頷くと、レンは「やつたあ！」と声を上げて喜んだ。

「こつちだよ」

レンを先頭に森の奥深くまで歩みを進めた。

「……でかい」と、雪風丸とイルタラの言葉。

「……豪華」と、アリスの言葉。

「……こんなところに、か」と、ディバルの言葉。

「まあ、屋敷にはたくさんの中があるので僕は図書館って呼んでるんですけどね。実際家族が生きてるときは居住のための家だったんですけど、一人じゃ広すぎて今は倉庫に住んでるんです。少し朽ちかけですけど広いよりも住みやすいんですよ」

「こっちです」とレンが手で招いている先は樹と樹の間に引っ掛けられたようなログハウス的な家屋だった。そして、そのウッドハウスに入つていった。

「さあ、お茶を。認めの葉を使ったお茶です。客人をもてなすとき一番最初に淹れるんです」

深緑の茶は煎り立てだった。

「あの、僕達って本当にこんなところにいてよかつたんですか？」

「レイラさんを」

イルタラは座つてお茶を飲んでいる一人に言つ。雪風丸は一つの植木鉢に目を向けていた。

「このつぼみ、埃が被つてている様子だが造花なのか、レン？」

雪風丸の後ろに歩み寄ってきたレンに問うた。

「いえ、本物の花です。私のつけた名前は『希望歌花』。歌うと気持ちよさそうに揺れるんです。それも希望を持つ歌ならとつても機嫌良くて、悲しみを語るものなら寂しそうにしょんぼりするんです。でも、今のままだと花は咲きません」

レンは花を越えてその先を見透かしたような表情をした。

「何故だ？ 特殊な育て方か？」

「いえ、違います。『希望歌花』は誰かの夢、希望と誰かの血が必要なんです。それにそれは勇敢な人で量は大量でそれが条件として

適つたとき、花は真つ赤な花弁をつけて、その夢、希望を叶えると
いうことです」

レンは自分の手の中にある血潮たちを尊く思いながら言った。
「私には闘つ力さえないんです。これは万能でなきやできない」と
なんですよ」

希望に望み、絶望に堕ちたような瞳。

「単純だな。私らが血をお前に捧げればいいんだろ?」

「いや、私には夢も希望もないですよ……絶望の果てまで堕ちたんだ」

ふとレンは視線に気がついた。一つは明らかにディバルが睨んだ

感覚ともう一つ、何処からかの視線だった。

「……どこでその絶望つてのを見たんだよ」

目を離してはいけないとと思うほど素直にレンの目を射ていた。

「えつ……私の家族が死んだときです」

束縛の状態を逃れるために必死で目を閉じた。

「絶望の意味さえ判らずに術者つて名乗つてんのか、このエセ術者」「ディバル! 何てこと言つてるんだ、駄目じゃないか。レンの哀しみが君には分かるんですか? 家族が死んだら誰だつ」

「貴様は分かるのか? 絶望と哀しみが」

ディバルがいきなりナイフをイルタラの喉元に当てた。

他の三人は呆然とその光景を見ている。

「絶望つてのは、この世だけじゃなくあの世までも希望のカケラを見つけることのできないことだ。生きていても意味がなく、死のうとしてもあの世に逝けない。逝けたとしてもまた引き戻される。それから、あとのことだ」

ディバルはとても幼い十四歳の頃、平和な世界が崩れる元凶を見てしまった。そのときに自害もしたのにディバルは死ねなかつた。周りの者は全て消え、徒、孤独に彷徨つた。自分が世界を変えることの出来る聖人だと気づかないまま。

そのとき、ディバルはこれが『絶望の一歩前』ということを知つ

た。

だが、そのときに過去 前世の記憶が蘇った。そして、前世が死ぬ直前に『希望へ墮ちる』とふいに思つたことがはつきりと云わつた。

人は二つの死が待つてゐるのだろうか。

希望の名の下、絶望の名の下。

ディバルはこれだけの死に方にこだわり殺す者として殺してきた。来世のその人が白く潔い心で明るい生活を送れるように。来世の人々が明るい平和な世界で暮らせるように。それは産まれるずっと前から願つてきただ。

再び上がる復讐の幕

「じゃあ、復讐つて何のためにするの？」

アリスが髪を弄りながら訊く。

『復讐、それには二つある。まず一つ、相手の大切な人を殺す。二つ、その本人を殺す』

壁の外からレイラの声が聴こえる。

木の壁とレイラの？身体？とが融合して揺れた。

『俺は希望を叶えたい。ディバル、お前は勇者なんだろ？俺にお前の血を捧げろ、そして死ね』

木の壁から出てきたレイラは焼けたはずの顔がすっかりもとの戻つていた。レイラの出てきた壁には焦げた後がはつきりと残つている。

「レイラ……？どうして戻つてるのよ」

恐怖に怯えた声でレイラを見る。

「アリス、あの時は護れなくてごめん。でも、遅くなつたけど君を迎えたよ。君は俺の元に戻るべきだ。さあ一緒に行こう。そして、ディバルという名の勇者を永遠に滅ぼして、俺たちは幸せに暮らそう」

ニッコリと笑つて手を差し伸べるレイラは作りたての人形と同じ様に不自然な表情が見えた。

「“悪”に全てを握られたのか、狂いおつて……？人形？が生身になれるわけもない。すべての未練が果たせたら消えるだろう魂がそこまでの欲を持つとは　奴はこの私、雪風丸が消す！」

と、傍にいたレンが、

「状況は全て分かりました。『希望歌花』は“悪”に満ちた人が近くにいるか、その人が願うとそれと全く反対のことが起こります。彼の場合は理想は崩され、こちら側が有利になります。しかしアリスさんの命が終わってしまいます」

雪風丸が頷くと、

「では、彼を消させて頂きます！」

レンが魔術を展開させた。

「テナン・シルク、ダークステージオープn。全ての力で敵・レイラ・ルネサンスをあの世へ送る！！」

「までっ？！」という間もなく、レンがベルトに挟んであつた杖を持つ。田の色がスッと変わった。青かった左目が赤黒くなつたのだ。右目はあるで役目がないかのように閉じかけている。

「関係のない奴は首を突つ込まなくてもいいんですよ？」

レイラはレンに歩み寄る。

「嫌だ！！ 近づくな。私を“悪”に侵さないでくれ！」

そういうレンは田に涙を溜めていた。そこでイルタラが櫛になつた。

「君はいいんだ。僕達が君に迷惑をかけてるんだ。君は鬪わなくていい。ここは僕がつ

イルタラがレイラに腹を殴られ、血を吐いた。アリスが今にも飛び出して止めようとしているところを、ディバルが前に出てきて止める。

「アリス、すまない。これで負けたら素直に奴のところに行つてやれ。そしたらお前が奴の心を清めてやるんだ、いいな？」

アリスが後ろからディバルにすがりついた。

「レイラのところへ私に死ねつていうこと？ 嫌よ、あなたと一緒に場所に行く。私は過去なんかと過ごしたくないわ！ 絶対…に…」

ディバルがアリスの手を離した。

「俺の言つていることがわかつてないらしいな。俺の、いや俺たちの目指すものつて何だつたか覚えてんのか？」

ディバルが耳元で囁いた。そしてアリスが崩れて呟いた。

「私たちが目指すもの、平等な安泰的な時代 平和を作ること」

そして死と

「俺に刃向かうな。伝説の花の主
レイラがレンを蹴りつけた。

「嫌だ、お前みたいに復讐するためにこの世にのさばつてゐる奴の話
なんて聞くもんか！ 母さん達だつて絶対にこの世に残つてないよ。
私は絶対にお前に『希望歌花』を譲らない！！！」

下からレイラを見上げるレンはそこにいる誰よりも鋭い決意に満
ちていた。

「いや、貴様の家族はずつと貴様のことを見守つていたらしいぞ」
ディバルが木の上からロープを翻し飛び降りてきた。雪風丸はウ
ツドハウスの手すりから先へは出ようとはせず手すりにもたれて蹲
つていた。

「魔術の…展開、つを…と、め…て、くれ」

苦しげな息づかいから、雪風丸は今闘つてゐる“善”の魔術か“
悪”の魔術かに影響されていた。その理由とは呪いにかかっていた。
戦闘の場で同じ術同士が相対したとき、力の強いほうのハンデを負
うという病んだ呪いだつた。力が強ければ強いほど全身から痛みが
溢れ出した。そして、その強い力が味方ならばもとより体が蝕まれ
ていく。

レンはレイラに適わないと分かりながら立ち向かつていつた。そ
のしぶとさに耐えかねたレイラはレイラにとつての最強の武器？聖
ラコジエの最初の剣“で斬りつけた。

防御壁をつくり相手の巨大な力を受け止めた。そしてそばからデ
イバルがレイラに斬りかかつていつた。

「ふんっ……一度も同じ手が使えるかよ 一二重防壁」

ディバルの前と後ろに防壁が出来上がつた。時に後ろの壁はレン
の隣まで伸びていた。そしてレンの壁をあわせ三枚の防壁がレイラ
の最高の武器と化した。

ディバルの斬つた波動がレイラの前の防壁に跳ね返り後ろの防壁にぶつかると、そのままレンに攻撃が当たった。レンは吹き飛ばされ、近くの木に当たり止った。レンはもう一度、立ち直ろうとしたが、自分の変化に気がついた。ディバルの攻撃は完全にレンを動かなくしていた。それを見た雪風丸がウツドハウスに戻り『希望歌花』を持ち出してきた。

「レン、ディバル願え！　レンの傷が治れと。私が犠牲になる！　お前の命となるから、なあ！」

雪風丸は自分を犠牲にしてもレンを助けたかった。何故そんな気持ちになるかなんて死ぬ直前と決めた雪風丸には関係がなかつた。「だめつ、です……私じゃなくて世界を。この広い世界の民を……救つてください。私が血を捧げます……ね？」

レンは痛々しく笑みを浮かべて涙を流した。

「お願いです……」

それを言つと、レンは痛みを無言で堪えていた。

「冗談はよしてよ……」

その言葉どおりに表情を浮かべた。それでも瞳の奥にある湖は悲しみという花しか浮かばせてはくれなかつた。

そして、アリスもウツドハウスから出てきた。

「こうなつて貴様はこいつらからあの花を奪つのか？」

ディバルがレイラに訊いた。

だが、その瞬間にレイラの？身体？は音を立てて崩れていつた。死んだわけではない　既に死んでいるから。消滅したわけでもない。

「逃げた……」

イルタラがやつと立ち上がつた。

「ごめん、何かの術にかけられてたみたいでした」

そして、ディバルが司祭のよつな、いや神のよつな目でレンを見た。

「レンの最期に祝福を。世界の始期に祝福を！」

真夜中に、ティバルの声が響き渡り、世界が光に満ちた。

「やつと俺たちの世界が出来た」「でも、 “悪” と共存なんて俺たちにはできない だから今すぐにでも首切つて死んで皆に感染しないようにしないといけないんだよ」

その峰には一人の男が立っていた。一人とも兵士のような服を着ていた。

アルバートは複雑な思いを持つて泣きじゃくつた。隣でのん気に座っているラコジエは、

「いいんじゃない？ だつてさ、死んでまた転生してこれば、きっと俺たちまた会えるし、あの世で落ち合つことだつて出来るよ それにさ、今生き残つて少しの間未来を見るよりもその先の未来を永く見れるじゃないか」

「もし、その未来が荒れてたら、お前はどうするんだよ」

足を持ち蹲つて、拗ねながら訊くアルバートは戦乱のために奪われた子供という感情を取り戻したようだつた。

「いいさ、その命使つても止めたつて神様は何も言わないさ」

ニッコリ笑うラコジエはまるで女性のようなしなやかさで地面を蹴り、踏みしめた。

「な、これ使えよ。切れ味抜群だから一思いに死ねるぞ」

ラコジエはベルトポシェットの中から一滴の血にも濡れたことのない純粹なナイフを取り出した。

「自害するために持つてた。つか、さつきまでの戦い終わつたらずつと死のうつて思つてた。俺、ずっとお前を騙してたから」

ラコジエはアルバートに真実を打ち明けた。戦いが始まる前から自分の中には“悪”が在つたこと。それでも、“悪”を押し殺したかつたがその“悪”がどうしても消えてくれなかつたこと

「ごめんな。俺 今から狂うよ」

そして、それがラコジエの最後の言葉となつた。
するとラコジエの背からは悪魔のよつた羽根が生えアルバートに
襲い掛かつた。

「ラコジエ……最期だよ」

アルバートは“第一番・詞にこめられた”を振り下ろした。
ラコジエは咆哮をあげて元に戻つた。だが、致命傷がその身体に
遺されて、ラコジエは一瞬で死を迎えた。

ああ、希望に墮ちる……

そう思い死んだ。

アルバートには漆黒の羽根たちが舞い落ちてきた。

「……俺が死ねるわけないよ　お前、来世なんてもの創るなよ」

アルバートは死ななかつた。

そのあと、民たちからその一人は神として崇められた。

これこそが　この世が狂つている証拠だつた。

500年前の終焉（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

この作品は今から三年前に電撃大賞に応募し、見事に落ちた作品です。

せつかくなので、すべて載せました。

是非、感想などいただけると、嬉しく思います。

けど、現在の自分にとつては結構な駄作なので、酷評はなかなかの痛手かと。

しかし（また逆接かよ）、酷評でもいいです。

嗚呼、支離滅裂になりました。ここで、失礼します。
ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2859d/>

世界にとっての喜び

2010年10月8日14時38分発行